

## 渡名喜島の陸上脊椎動物

当山 昌直\*

渡名喜島は、沖縄島の西方約55kmの地点にある小さな一島嶼である。島の面積が小さい割には地形・地質は非常に変化に富んでいる。島の中央部には海浜堆積物からなる低地があり、そこには集落が発達している。集落を境にして、北側には主として第三紀の火成岩類からなるニシムイ（146m）、南側には古生代の渡名喜累層からなるウフダキ（179m）があり、特に南側はウフダキを中心にして起伏のはげしい複雑な地形を形成している。このように、地形・地質が変化に富んでいること及び他の島との位置関係等も考え合わせると、渡名喜島は生物地理学上非常に興味深い島である。

しかし、渡名喜島の陸上脊椎動物に関する報告は少なく、渡瀬（1911）Maki（1930）・高良（1962）等をあげることができるがいずれも断片的に取扱われているにすぎず、総合的な調査を必要としていた。

このようななかで、筆者は1972年5月6日～8日、1980年8月9日～14日の間、渡名喜島に滞在し調査を行なった。調査はまだ中途ではあるが、これまでの段階で得られた資料をまとめておきたい。

### 調査方法

調査は、採集及び目撃によって生息している種類を確認することに主眼をおいた。したがって、動物の生息場所及び出没の時間帯等を考慮して、出来る限り広く歩きまわり、早朝・夜間調査も行なった。

両生爬虫類の聞込み調査は千石編（1979）の写真を提示して行なった。鳥類は、鳴き声と目撃とによって確認し、できるだけ写真撮影をして後日専門家に種類を確かめてもらった。哺乳

(\*とうやま まさなお、学芸員)

類は、食虫類や齧歯類にはシャーマントラップを用いたが、他は聞込み調査にたよった。

### 調査結果

以下にこれまでの調査で確認された種類をあげる。確認された種類は、それぞれ採集・目撃地点と日付が記されている。これまでの調査では確認できなかったが生息が確実と思われるものも、一応リストに加えておいた（※印）。ヘビ類については高良（1962）の資料も加えた。なお、学名の取扱いは、主として千石編（1979）・小林（1976）・今泉（1960）にしたがった。採集・目撃地点の名称は、図1との対象を容易にするためアルファベット記号を付してある。

#### 両生類 AMPHIBIA

##### 有尾目

###### イモリ科

シリケンイモリ *Cynops ensicauda*

(B); V 7, 1972.

##### 無尾目

###### アカガエル科

※ヌマガエル *Rana limnocharis limnocharis*

ウシガエル *Rana catesbeiana*

(H); VII 11, 1980.

#### 爬虫類 REPTILIA

##### 有鱗目

###### ヤモリ科

ニホンヤモリ *Gekko japonicus*

(L); V 7, 1972 · VII 10, 1980. (O); VII 10, 1980.

ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus*

(G); V 7, 1972 · VII 13, 1980.

※マダラトカゲモドキ *Eublepharis kuroiwae orientalis*

アガマ科	リュウキュウサンコウチョウ <i>Tersiphone atrocaudata illex</i>
※キノボリトカゲ <i>Japarula polygonata polygonata</i>	©: VII 11, 1980
トカゲ科	ウグイス科
オキナワトカゲ <i>Eumeces marginatus marginatus</i>	リュウキュウウグイス <i>Cettia diphone riukiuensis</i>
©; V 5, 1972.	②; VII 10, 1980. ③; VII 12, 1980.
ヘリグロヒメトカゲ <i>Ateuchosaurus pelloplerus</i>	セッカ <i>Cisticola juncidis bruniceps</i>
①: VII 10~11, 1980.	①; VII 10, 1980.
カナヘビ科	ツグミ科
アオカナヘビ <i>Takydromus smaragdinus</i>	イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius philippensis</i>
⑨; V 7, 1972. · VII 9, 1980.	①: VII 10, 1980
メクラヘビ科	ツバメ科
メクラヘビ <i>Typhlina bramina</i>	ツバメ <i>Hirundo rustica gotturalis</i>
ナミヘビ科	©; VII 10~11, 1980.
リュウキュウアオヘビ <i>Opheodrys semicarinatus</i>	コウノトリ目
アカマタ <i>Dinodon semicarinatus</i>	サギ科
ガラスヒバア <i>Amphiesma pryeri pryeri</i>	クロサギ <i>Egretta sacra sacra</i>
⑩; VII 11, 1980.	②; VII 11, 1980.
コブラ科	チドリ目
ハイ <i>Calliophis japonicus boettgeri</i>	シギ科
①; VII 12, 1980.	キアシシギ <i>Tringa brevipes</i>
マムシ科	⑩; VII 11, 1980.
ヒムハブ <i>Trimeresurus okinavensis</i>	ツル目
ハブ <i>Trimeresurus flavoviridis</i>	ミフウズラ科
鳥類 AVES	ミフウズラ <i>Turnix suscitator okinavensis</i>
スズメ目	②; VII 11, 1980.
ハタオドリ科	哺乳類 MAMMALIA
スズメ <i>Passer montanus saturatus</i>	食虫目
⑥; VII 9~14, 1980.	トガリネズミ科
キセキレイ科	ワタセジネズミ <i>Crocidura horsfieldi watasei</i>
キセキレイ <i>Motacilla cinerea robusta</i>	②; VII 9, 1980.
⑦; VII 12, 1980.	リュウキュウジャコウネズミ <i>Suncus murinus riukianus</i>
ヒヨドリ科	④; IV 29, 1978. (田中聰採集)
ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>	齧歯目
⑤; VII 10, 1980. ⑥; VII 10, 1980. ⑦; VII 12, 1980.	ネズミ科
ヒタキ科	クマネズミ <i>Rattus rattus</i>
	⑦; III 16, 1981. (親川保男他採集)

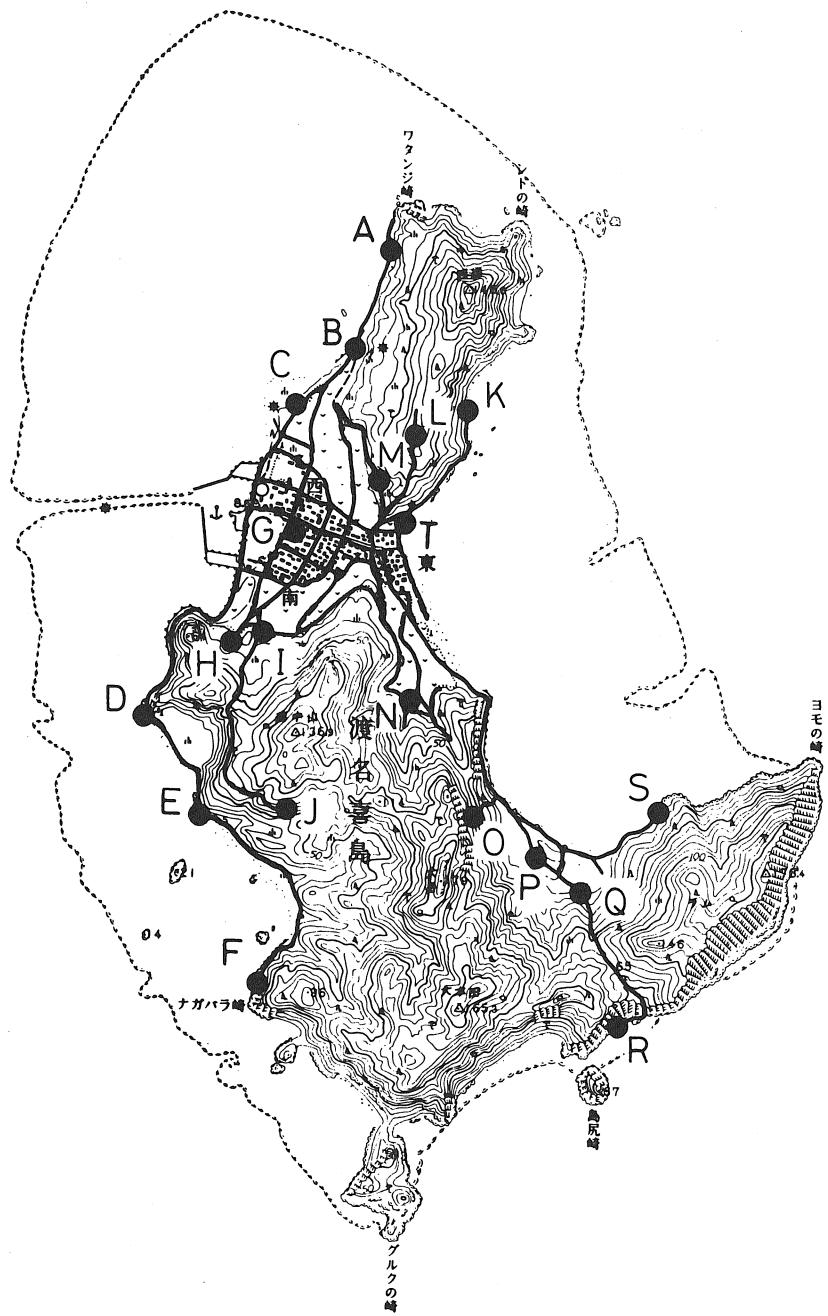


図1. 渡名喜島における調査地。実線は調査によって歩きまわった所を示す。  
黒丸は調査地点をあらわし、その地点の名称を便宜上A～Tの記号であらわした。

- (A)(D)(E)(F)(K)(R)(S) 岩礁性海岸
- (B) 湿地
- (C)(P) 防風林
- (G) 部落内
- (I)(M) 耕作地縁部
- (L) 拝所
- (N)(O) 古い墓地
- (H) 農業用水溜め
- (T) 廃捨場

## 調査結果の検討

### 両生類

シリケンイモリは⑧地点で採集された。ヌマガエルの成体は採集されていないが、1972年5月7日に本種と思われるオタマジャクシを⑧地点で採集している。ただ、標本が残っておらず現時点では再検討することができないので結果では※印に取扱った。ウシガエルについて、1972年5月の聞込みによると、『ごく最近（1972年当時）ウシガエルが持ち込まれて学校（旧）の池に放されたらしい』という情報が得られていた。1980年8月の聞込みでも、7、8年前に久米島からウシガエルが持ち込まれたという情報が得られたが、これはおそらく前者と関連しているものと思われる。情報を整理すると、ウシガエルは、1972年ごろ久米島より持ち込まれ現在に至るまで定着、繁殖しているものと推察される。

イボイモリ・ヒメアマガエル（特に幼生）・アオガエル類についての聞込みでは生息するとの情報は得られなかった。ただ、⑧地点周辺には「アタビーより大きいガマがいる」と話した人もいた。どの種類をさすのか見当がつかないが参考のためあげておく。

### 爬虫類

ニホンヤモリは、主として集落から離れた所にみられたがホオグロヤモリは集落内にだけみられた。1972年5月の調査の時点においては、集落内の街燈のまわりに多数のヤモリ類がみられた。しかし、1980年8月の調査では極端に少なくなっていた。結局、調査の終盤になってやっとホオグロヤモリが採集された。以前より部落内のヤモリ類が減ったことは、現地の方も話していた。

マダラトカゲモドキは、渡名喜島産の標本に基づいてMaki (1930) によって記載し発表された。つまり、渡名喜島はマダラトカゲモドキが最初に発見されて学名を付けられた模式産地に

なるわけである。その後、中村・上野（1963）によって分類上の整理がなされ、沖縄島に生息するクロイワトカゲモドキの亜種とされ、久米島・渡嘉敷島産のものも同一亜種として取扱われた。しかし、以後、渡名喜島で採集された記録はなく、それが分布の確認もできなかった。今回、現地での聞込み調査によって次のようなことがわかった。『戦前、渡名喜島にハブ取りの比嘉筆助がいて、彼は昭和2、3年（1927～1928年）ごろ島の南東側にあるアンジェーラ（図1の①②付近）という所から奇妙な動物を捕まえてきた。その奇妙な動物は、「アシハブ」と名付けられて村でも大変な評判となった。』

そこで、実際その「アシハブ」を見た人にトカゲモドキの写真を見せたところ同じものだと答えていたので、「アシハブ」とはトカゲモドキの事をさしていることがわかった。その後、この「アシハブ」がどうなったか知られていないがおそらく捕獲したハブと一緒に那覇方面へ送り出された可能性が高い。渡名喜島では、その前にも後にも「アシハブ」を採集したということを現地の人は聞いたことがないらしいので、枚茂一郎が1930年に発表したのは比嘉筆助が採集した標本のようである。Maki (1930) の原記載には採集者名は明記されておらず、ただ謝辞の部分に K. Kanna と記されているだけである。また、国立科学博物館に保管されている模式標本のラベルには、K. Kanna としかなく、特に採集者として明記されていないようである（上野俊一氏 1981年 私信）。独断が許されるならば、本亜種は、渡名喜島で比嘉筆助によって採集され、それが K. Kanna（漢那？）の手に渡り、枚茂一郎のもとに提供されたように思われる。

マダラトカゲモドキの分布の確認は、今回の重要な調査項目の一つでもあった。野外では、⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱地点を夜間調査したが確認できなかった。したがって、渡名喜島では沖縄島や渡嘉敷島に比べてトカゲモドキの個体数が少ないかまたは棲み場所が限定されていると考えられる。

キノボリトカゲは今回の調査では目撃できなかった。現地の人に本種の写真を提示して聞いたところ、以前は屋敷林のフクギなどにもよくみられたが最近ではほとんどみられなくなつたとの事である。聞込み調査での回答者全員が生息していると答えたこと、方言名もあることなどから本種の生息は確実と思われたのでリストに加えた。

当山（1980）は、粟国島のオキナワトカゲを一地方変異として取扱った。渡名喜島のオキナワトカゲについては頭胴長56.6mmの亜成体しか検討ができなかつたがそれにはこのような粟国島産にみられたような特異性はみられず、形態的には沖縄島のオキナワトカゲの変異内に含まれるものであった。

ミヤコトカゲについて、当山（1976、1979）は、宮古群島内の島々で本種が生息しているのを確認し、その生息地が岩礁性の海岸に限られていることを示した。本種は、現在のところ宮古群島が分布の北限になっているが、沖縄群島でも発見される可能性があり、既産地での生息条件を考慮し詳しい調査する必要があると思われる。今回、渡名喜島の岩礁性海岸ⒶⒶⒶⒻⒼⓇⓇ地点を重点的に調査をしたが確認されなかつた。

渡名喜島産のアオカナヘビの雄は、背面両側背面が緑、側面が褐色を呈し、雌は、白縦線を欠き全体的に緑色を呈した。検討した個体数が少ないので断言できないが、おそらく当山（1980）に示される粟国島産のアオカナヘビと同様な変異性がみられるものと思われる。

今回採集されたハイは、体背面の黒色横斑が全く消失し、完全な5本の縦線を形成している。

渡名喜島は、ハブ取りの比嘉筆助のことが記されている。比嘉は、45年間で5千匹を下らない数を退治したとされている。もしそれが事実ならば年間およそ、100匹以上捕獲していた計算になる。島の面積の割には多いといえるかもしれない。

現在、渡名喜島ではハブ取りを專業としている人はいないので自然状態の個体数が保たれてい ると思われる。渡名喜島のハブは如何なる要因でこのように多いといわれている個体数を保っているのか興味深いところである。今回は、図1に示す範囲を5日4夜にわたって昼夜の調査を行なつたがハブは目撃されなかつた。これは、今回の調査期間が、日照続きで乾燥していたためと思われる。

聞込み調査によると、陸棲のカメ類は、全くみられないようであるがただ一例だけ戦後間もないころ南側の山でカメをみたことがあるという人がいた。もし、渡名喜島に陸棲のカメ類が分布しているとすれば、近隣の久米島・渡嘉敷島にも分布するリュウキュウヤマガメの可能性が強い。渡名喜島の動物相は、マダラトカゲモドキやハブが分布していることを考慮すると、久米島・渡嘉敷島のそれと類似する点がある。したがってリュウキュウヤマガメの分布の確認については今後注意して調査する必要がある。

## 鳥類

Ⓐ地点でみられたキアシシギは、夜間調査の時に農業用水溜めに休息していたところを写真撮影した。後日、写真資料に基づいて与那城義春氏に種名を確認して頂いた。

聞込みによると、島ではメジロ・アカショウビン・カラス・ツバメ・サシバ・ウズラなどがみられるとのことであった。メジロ・アカショウビンは、調査期間中にその鳴き声を耳にすることはできなかつた。カラスは、渡名喜島には定着してはいらないらしくどこからか飛んで来るらしい。サシバは、毎年10月ごろみられるらしい。

## 哺乳類

ジネズミは①地点に至る途中の参道で死体を二個体拾得した。いずれも腹部に損傷を受けていたが腐敗はそれほど進んでいなかつた。10%ホルマリンで固定したあと75%アルコールに投入し保管した。周辺には野生化したイエネコが

出没していたので、それに殺傷されたものと推察される。これらのジネズミは、外部形態や頭骨の測定及び検査に基づいてワタセジネズミと同定した。表1にその測定値を示す。外部形態は液漬標本を測定した。測定方法は、黒田(1940)・今泉(1970)を参考にした。

表1. 渡名喜島産ワタセジネズミの測定値

		ワタセジネズミ	
		No.1	No.2
雌	雄	?	?
頭 胴 長		65.0	65.0
尾 長		46.0	47.0
後 足 長		11.7	11.5
耳 長		7.7	7.8
頭蓋最大長*		18.3	18.3
基 底 長*		16.0	16.0
頭蓋最大幅		8.1	8.2
眼窩中隔幅		4.0	4.1
上歯列長*		7.9	8.0
上臼歯外側		5.4	5.4
下 頸 骨*		11.2	11.3

\* 門歯を含む

単位:mm

渡名喜島産のワタセジネズミを測定したところこれまでの記録値より若干大きいことがわかった。黒田(1940)に示された測定値と比較すると、頭胴長の比率が他の測定部位と比べ大きいが、これは、腹部に損傷を受けていたことによる誤差と考えられる。今泉(1970)は、頭骨の全長が17.2mmを越えないことを本亜種の標徴としているが、渡名喜島産のものは18mmを越えている。本亜種は、これまで奄美大島・徳之島・沖縄島・伊江島から記録されていたが今回の調査で渡名喜島にも分布していることが判明した。今後おそらく、奄美・沖縄群島の島々から記録が加えられることと思われるが、その際には多くの標本に基づく形態変異の検討が必要と思われる。

その他の食虫類や、齧歯類は、シャーマントラップ10個を⑥H⑦L⑧M⑨P⑩Q地点に調査期間中の4夜にわけてしかけたがいずれも捕獲できなか

った。リュウキュウジャコウネズミは、琉球大学生物学生田中聰氏が採集したものである。クマネズミは、渡名喜中学校親川保男教諭と生徒達の協力によって収集できた。採集されたネズミは、耳介が目に届くこと、腰部に太くて長い毛が混生していること、尾が頭胴長より長いこと、第一上臼歯の前列にくびれが認められることによってクマネズミと同定した。リュウキュウジャコウネズミ(液漬)とクマネズミ(生体)の外部形態の測定値を表2に示す。

表2. 渡名喜島産リュウキュウジャコウネズミとクマネズミの測定値

リュウキュウ ジャコウネズミ	クマネズミ	No.1	No.2
雌 雄	♀	♂	♀
頭胴長	95.0	130.0	126.0
尾 長	60.0	155.0	155.0
後足長	18.5	31.0	30.0
耳 長	12.6	21.0	19.0

単位:mm

聞込みによると、大きなコウモリは渡名喜島ではみられないらしい。小さなコウモリは、戦前⑥地点の250m程南にある小島と⑦地点の付近でみられたらしい。

渡瀬(1911)は、動物学雑誌上で、渡名喜島のマンガースにふれている。当時、沖縄はハブやネズミの害に悩まされていたころで、その対策の一つに天敵を利用することを考えていた。その事情を知らされた東京帝国大学(東京大学)教授渡瀬庄三郎博士は、ハブ及びネズミを駆除する目的で沖縄県にマンガースを移入することを具体化した。移入されたマンガースは、当時の沖縄県農事試験場において飼育実験がなされ、その後沖縄島の4ヶ所と渡名喜島との計5ヶ所に放された。しかし、その時点において問題点が二つあった。それは、マンガースが野外において実際にハブを捕食するかどうか、また、インド産のマンガースがはたして沖縄で繁殖できるかどうかということであった。渡瀬(1911)の論文には、その結論としてマンガースは野生

のハブを捕食するとしているが繁殖については若干の疑問を残しているようである。現在、渡名喜島ではマングースを目撃することはできないらしい。おそらく個体数が維持できずに絶滅した可能性が高い。1963年の時点においてもすでにマングースの姿は全くみられなかつたとされている（内田、1963）。しかし、同年代に沖縄島に放されたマングースは、今日に至つて著しく増加をし、分布域を広げつつあるようにみえる。おそらく、渡名喜島はマングースが生存し続けるにはきびしい所であったのかもしれない。ところが、マングースは、ハブやネズミ類だけでなく、他の動物も捕食する。そのことは、岸田（1927）に示される骨内容物の資料をみてても明らかである。したがつて、これまで野生の肉食獣が生息していなかつた沖縄島にマングースを入れたことによって自然界のバランスが崩されてしまつて危険がある。そのような兆候がすでに一部の地域であらわれている。もし渡名喜島のマングースが今日に至るまで繁殖していたらおそらく、より極端な影響があらわれていゝ事であろう。

渡名喜村役所の記録によると1970年1月25日80頭、同年2月15日45頭のイタチを九州方面から移入している。性比は5：1の割合だったらしいが詳しいことは不明である。島の数ヶ所に水場等を設置したが数年でイタチはみられなくなつたらしい。

### 今後の課題及びまとめ

調査は、まだ中途の段階にあり、集まった資料もまだ不充分である。特に、鳥類については専門的見地からの調査が必要である。聞込み調査も一部の人に対してなされたにすぎず、今後さらに対象をふやし継続しなければならないだろう。

これまでの調査結果から、渡名喜島は、島の面積が小さい割には動物相に富んでいるように思われる。おそらく、未記録の両生爬虫類と哺乳類が今後の調査によって見い出されるものと

考えられる。

### 謝 辞

教育委員会の比嘉軍次郎氏、渡名喜小学校教諭高島一郎氏にはいろいろとお世話になった。また、調査に協力して頂いた現地の方々、本稿をまとめるにあたつて御教示をいただいた京都大学松井正文・疋田努、大阪市立自然史博物館柴田保彦の各氏に感謝の意を表す。

### 文 献

- 今泉吉典、1960。原色日本哺乳類図鑑。保育社、大阪。
- 、1970。日本哺乳動物図説(上)。新思潮社、東京。
- 河村只雄、1942。續南方文化の探究。創元社、東京。
- 岸田久吉、1927。マングースの食性調査成績。農林省鳥獸調査報告、4：77—120。
- 小林桂助、1976。原色日本鳥類図鑑。増補改訂版、保育社、大阪。
- 黒田長礼、1940。原色日本動物図説。三省堂、東京。
- Maki, M., A new banded gecko, *Eublepharis orientalis*, sp. nov. from Ryukyu. Annot. Zool. Japon., 13: 9—11.
- 中村健児・上野俊一、1963。原色日本両生爬虫類図鑑。保育社、大阪。
- 千石正一編、1979。原色両生爬虫類。家の光協会、東京。
- 高良鉄夫、1962。琉球列島における陸棲蛇類の研究。琉大農家政工学部学術報告、9: 1—202。
- 当山昌直、1976。ミヤコトカゲの生息の確認。沖縄生物学会誌、14: 61—66
- 、1979。両生、爬虫類。平良市教育委員会、郷土の自然、89—96p。
- 、1980。粟国島の陸上脊椎動物。沖縄県立博物館、県立博物館総合調査報告書Ⅰ—粟国島、51—54p。

のハブを捕食するとしているが繁殖については若干の疑問を残しているようである。現在、渡名喜島ではマングースを目撃することはできないらしい。おそらく個体数が維持できずに絶滅した可能性が高い。1963年の時点においてもすでにマングースの姿は全くみられなかつたとされている（内田、1963）。しかし、同年代に沖縄島に放されたマングースは、今日に至つて著しく増加をし、分布域を広げつつあるようにみえる。おそらく、渡名喜島はマングースが生存し続けるにはきびしい所であったのかもしれない。ところが、マングースは、ハブやネズミ類だけでなく、他の動物も捕食する。そのことは、岸田（1927）に示される骨内容物の資料をみてても明らかである。したがつて、これまで野生の肉食獣が生息していなかつた沖縄島にマングースを入れたことによって自然界のバランスが崩されてしまつて危険がある。そのような兆候がすでに一部の地域であらわれている。もし渡名喜島のマングースが今日に至るまで繁殖していたらおそらく、より極端な影響があらわれていゝ事であろう。

渡名喜村役所の記録によると1970年1月25日80頭、同年2月15日45頭のイタチを九州方面から移入している。性比は5：1の割合だったらしいが詳しいことは不明である。島の数ヶ所に水場等を設置したが数年でイタチはみられなくなつたらしい。

### 今後の課題及びまとめ

調査は、まだ中途の段階にあり、集まった資料もまだ不充分である。特に、鳥類については専門的見地からの調査が必要である。聞込み調査も一部の人に対してなされたにすぎず、今後さらに対象をふやし継続しなければならないだろう。

これまでの調査結果から、渡名喜島は、島の面積が小さい割には動物相に富んでいるように思われる。おそらく、未記録の両生爬虫類と哺乳類が今後の調査によって見い出されるものと

考えられる。

### 謝 辞

教育委員会の比嘉軍次郎氏、渡名喜小学校教諭高島一郎氏にはいろいろとお世話になった。また、調査に協力して頂いた現地の方々、本稿をまとめるにあたつて御教示をいただいた京都大学松井正文・疋田努、大阪市立自然史博物館柴田保彦の各氏に感謝の意を表す。

### 文 献

- 今泉吉典、1960。原色日本哺乳類図鑑。保育社、大阪。
- 、1970。日本哺乳動物図説(上)。新思潮社、東京。
- 河村只雄、1942。續南方文化の探究。創元社、東京。
- 岸田久吉、1927。マングースの食性調査成績。農林省鳥獸調査報告、4：77—120。
- 小林桂助、1976。原色日本鳥類図鑑。増補改訂版、保育社、大阪。
- 黒田長礼、1940。原色日本動物図説。三省堂、東京。
- Maki, M., A new banded gecko, *Eublepharis orientalis*, sp. nov. from Ryukyu. Annot. Zool. Japon., 13: 9—11.
- 中村健児・上野俊一、1963。原色日本両生爬虫類図鑑。保育社、大阪。
- 千石正一編、1979。原色両生爬虫類。家の光協会、東京。
- 高良鉄夫、1962。琉球列島における陸棲蛇類の研究。琉大農家政工学部学術報告、9: 1—202。
- 当山昌直、1976。ミヤコトカゲの生息の確認。沖縄生物学会誌、14: 61—66
- 、1979。両生、爬虫類。平良市教育委員会、郷土の自然、89—96p。
- 、1980。粟国島の陸上脊椎動物。沖縄県立博物館、県立博物館総合調査報告書Ⅰ—粟国島、51—54p。

内田照章、1963。琉球列島の哺乳動物相、とく  
に動物地理学的考察と鼠類の生態に関する 2、  
3 の知見。九州大学海外学術調査委員会学術  
報告第 1 号。117—138

渡瀬庄三郎、1911。渡名喜島の「マンガース」繁  
殖す。動雜、23：109—110